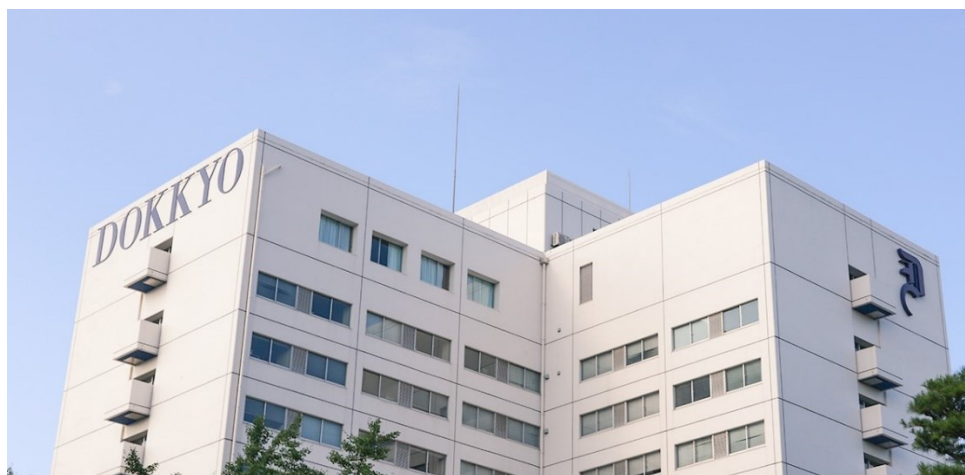


【日本の大学】第 82 回—獨協大学：人間形成重んじる文系総合大学

獨協大学の起源をたどると、1883（明治 16）年に設立された獨逸学協会学校に行きつく。同学校はその 2 年前の 1881 年に設立された獨逸学協会が母体となっており、ドイツの文化や学問体系を導入して合理的、実学的な教育を行い、日本国内のドイツ人教員とドイツから招聘した教員による授業を実施したことに端を発している。

獨逸学協会学校が設立された 1883 年は、文明開化期の象徴である「鹿鳴館」が開館するなど日本が本格的に国際化へ歩み始めた年であった。獨逸学協会学校の創立も、そうした時代状況を映したものであった。学校設立の母体となった獨逸学協会は、明治を代表する人物である品川弥二郎、桂太郎、加藤弘之、西周らによって設立されたもので、獨逸学協会学校の初代校長となった西周は、開学式典で「学ヲ為スノ道ハ、先ヅ志ヲ立ツルニ在リ」と述べるとともに、「知育、徳育、体育」の総合、すなわち今日の教養教育の大切さを強調した。

学校創立の翌年には、5 年制の中学に法律・政治の専修科を加えた法律の専門学校を開学し、その後、ドイツ語を教える唯一の中学校として医学界を中心に多くの人材を輩出してきた。ドイツ語とドイツ文化の学習を通して国際人を育てるという獨逸学協会学校設立以来の伝統は 140 年もの時を超えた現在も受け継がれており、大学では外国語教育と国際交流に特に力を入れている。



中央棟

天野貞祐氏が建学・初代学長

大学設立の機運が高まったのは 1960 年代である。大学設置構想が発表され、1963 年には設置委員会が発足した。埼玉県草加市に獨協大学が開学したのは 1964 年である。大学設立

の中心となったのは、哲学者、教育者である天野貞祐氏である。氏は「大学は学問を通じての人間形成の場である」という建学の精神を掲げ、大学教育に関する自らの理念を実現すべく獨協大学を建学し、初代学長に就任した。



天野貞祐先生之像

現在は外国語学部、国際教養学部、経済学部、法学部という 4 学部 11 学科と大学院を要する私立の文科系総合大学へと発展している。

以下、獨協大学のホームページなどから、大学の歴史と現況を見ていこう。

大学の創立者である天野氏は獨逸学協会学校中学を卒業したあと、旧制第一高等学校、京都帝国大学・大学院で学び、卒業後は旧制七高（現・鹿児島大学）や学習院、京都帝国大学の教授として教鞭をとった。カントの「純粹理性批判」を日本で初めて完訳した学者としても高名である。第2次大戦後は、学制改革前の旧制第一高校長を務めたり、中央教育審議会会長や吉田茂内閣の文部大臣に就任したりするなど、戦後教育の復興に当たった。

獨協学園に関しては 1952 年、母校の獨協中学高等学校の校長に就任し、獨協学園の再建に尽力した。大学創設にあたって天野氏は、入学試験の難しさや大学入学後の学生がその反動で向学心を失う傾向があることなど、日本の大学教育一般に関する問題点を指摘し、入学

は優しいが大学での授業は厳しく、卒業が難しい、学問を媒介とした人間形成を主眼とする大学を目指す、という趣旨の建学の精神を掲げた。



天野貞祐記念館・図書館

外国語教育の伝統重視

大学の学則でも、第1条で「社会の要求する学術の理論および応用を研究、教授することによって人間を形成し、あわせて獨協学園の伝統である外国語教育を重視して今後の複雑な国内および国際情勢に対処出来る実践的な独立の人格を育成することを目的とする」と謳っている。

1964年の大学開学の際には、外国語学部と経済学部を置いた。外国語学部にはドイツ語学科と英語学科があり、経済学部は経済学科1学科でのスタートだった。その後は、2年後に経済学部経営学科を増設し、翌67年には法学部（法律学科）を設置するとともに、外国語学部フランス語学科が加わった。1977年には大学院の法学研究科（修士課程）を置き、1986年には大学院外国語学研究科修士課程（ドイツ語学専攻、英語学専攻）が設置されるなど、大学院各研究科の充実が図られた。

学部関係では1999年に外国語学部言語文化学科を増設、法学部には国際関係法学科を増設している。4番目の学部として国際教養学部が誕生したのは2007年である。この年に

は、地域総合研究所や環境共生研究所が開設されるなど、研究所の充実も行われている。

外国語学部は現在、ドイツ語、英語、フランス語、交流文化の4学科である。外国語を学び実用的なレベルで運用できることはもちろん、言語を通じて異文化と交流することによって広がる世界を学ぶことを重視している。各言語圏の政治や経済から歴史、文学に至るまで広範な知識の習得が可能となるカリキュラムを組んでいる。

経済学部は、経済、経営、国際環境経済の3学科からなる。日本社会の国際化、情報化、専門化、多様化などに適応できる豊かな教養と専門知識を備え、外国語の運用能力を身につけた優れた社会人の育成を目的に掲げている。経済学や経営学の基礎はもちろん、より専門的な知識を学べるよう、経済学科に3コース、経営学科に4コース、国際環境経済学科に2コースを設け、体系的、系統的な教育に当たっている。

法学部は法律学科のほか、国際関係法学科、総合政策学科がある。物事の本質を把握し、理解するために、歴史や文化、政治制度の異なる諸外国の状況にも関心を持つことが大切である。法学部では、こうした総合的学問としての法学の性格を考慮し、基礎的知識や技能、専攻分野の学問的方法や専門的知識が身につけられるよう、各学科の特質に応じた専門科目をそれぞれの学期に段階的に配置している。

国際教養学部は言語文化学科1学科である。近代以降の日本は、欧米をモデルとしながら、それだけではない広範な「知」を獲得、蓄積してきた。学部では、こうした「知」を国際社会が求める「教養」として再構築するための教育・研究を進めている。マルチリンガルを基礎として、幅広く深い教養とコミュニケーション能力を身につけ、多様化が進む国際社会の中で、世界の人々と新たな創造を行うことのできる人材の育成を目指す。

「英語とスペイン語」「英語と中国語」「英語と韓国語」という三つの組み合わせから一つを選択し、2言語を併習するカリキュラムを採用している。二つの外国語を「読む」「書く」「聞く」「話す」という運用能力を専門的なレベルに到達させるカリキュラムを実施している。



獨協大学コミュニティスクエア

全学部で少人数のゼミ教育

大学では、全学共通のカリキュラムとして、主体的なゼミナール教育を重視している。“ゼミ”の名で知られ、今日ではどの大学でも一般的となっているゼミナール教育は、教員の指導の下に少数の学生が集まって研究し、発表・討論などを通して授業を行っていく方式で、本来ドイツで生まれた教育方法である。獨協大学では、この方法を「学問を通じて人間形成を行っていく」という教育理念を実践するにふさわしい方法として創立時から積極的に取り入れてきた。今日でも、すべての学部で力を入れており、全学科合計で 160 以上のゼミが開設されている。

ゼミ教育は、学生と教員、卒業生との絆を生み出し、すべての学部、学科の学生が同じキャンパスで学ぶ「オールインキャンパス」と相まって、獨協大学独自のフレンドリーな雰囲気醸成している。

大学では、グローバル人材の養成と並んで、地域社会の中心となりうるのかという視点を大切にしている。グローバルな視点に立ちつつローカルに行動していくことを重視している。地元である埼玉県草加市に居を構えて半世紀が過ぎ、地域とともに歴史を刻んでいく大学において、教える者も学ぶ者も「社会の一員としての使命は何なのか」を考えていく必要がある。この具体的な取り組みとして、大学の前を流れている伝右川のきれいな水と賑わいを再構築するために、埼玉県と草加市、地域住民と関わり合いながら、長期的な視点に立つ

た活動を始めている。



キャンパス風景

大学では、学生の留学支援や海外の大学との学術交流、国際シンポジウムの開催などを推進するため国際交流センターを設けている。外国人留学生は、来日すると日本語がどのレベルにあるかテストし、そのレベルに見合った日本語学習のカリキュラムが組まれている。日本語教育オフィスが中心となって学生サポーターが日本語学習を支援する活動を実施している。あるレベルに達した学生に対しては地元の自治体、企業や団体に短期のインターンシップを用意し、外国人学生のビジネス体験を支援している。外国人留学生数は、この数年 30～40 名で推移している。

学生数は、学部が 4 学部合計で 8147 名である（2022 年 5 月現在）。教員は専任が 212 名、職員が 152 名の計 364 名である（2020 年 8 月現在）。

学長は山路朝彦氏である。東京外国語大学大学院で文学修士を取得、専門はドイツ文学、ドイツ語教授法。1986 年に獨協大学に就職、外国語学部ドイツ語学科助教授をへて 2001 年から同教授。2012 年 4 月から副学長、学園理事。2020 年 4 月、学長に就任した。

日文：滝川 進
写真：獨協大学 HP